

社会の変化について断片的思索

「蝶の雑記帳 122」

新聞書評にリストアップされているのを見て、渡辺京二著『小さきものの近代1』を読んだ。以前の著書『逝きし世の面影』が印象に残っていたからである。そこには、日本の近代への移り変わりが独特のトーンで語られていた。近世の社会とそれが作り出した人々の生活が貴重なものだったことが描かれている。たしかにかつての日本に捨てるには惜しい文化とそれを生きた人々がいたと、語りに魅せられながら思った。新聞書評にとり上げられた今度の書物も興味深いだろう。その本は7月末に出版されたのだが、取り寄せようとしたら、読者の多い著者のこと、インターネット上で10月末にはすでに古本しか見つからなかった。

美しい装丁の本を手にとって読んだ。何事によらず古い時代の出来事に興味のあるわたしは、近世の文化のなかで育ち暮らした人々のさまざまな生き方に感心するところがあった。日本人はやはり、いくつかの失ってはいけない生き方・暮らしぶり・志操などを、近代化の道すがら見棄てたのだ、と思う。だが、それをこの思索で重ねて惜しんでも意味がないだろう。ここでは敢えて、違和感をいだいた文を手がかりにして、異なる角度から、日本の近代化の時代に起きた社会の変化を考えてみたい。

第六章には次のような文章がある。―「外圧を前にして、

当時執るべき途は二つあった。ひとつはむろん現実となった倒幕＝維新政府の出現であるが、幕府自体もしくはそれを中心にして中央集権国家を創る途も、理屈の上ではありえなし、事実その途を模索した幕臣もあった」―。この文は、歴史が後者の途をたどらなかったことを残念に思っていることをにじませている。それが好悪の感想だけのことなら、わたしがここで異論をさしはさむことではない。

しかし、続いて次のような三つの文が書かれている。―
「フランスや英国の例をとっても、幕府主導の近代国家実現の途は、世界史の潮流にはずれたものではなかった。周知のようにフランスでは、封建領主の第一人者にすぎなかったヴァロア・ブルボン王朝が、次第に諸侯の実権を回収し、フランス革命以前に、近代的集権国家を創り上げていたのである。トクヴィルが近代的社会の実質は、フランス革命によって何ら変わることがなかったと論じたゆえんである」―。

最初の文は「幕府主導」を「討幕派主導」に置き換えても成り立つ、すなわち、二つの途のどちらも近代国家実現への途であったという点でちがいはない。重要なのは、実現される「近代国家」がどのような実質を獲得するかにあった、と思う。わたしが違和感をもつのは、第二の文にある「近代的集権国家」と第三の文にある「近代的社会の実質」についての著者の認識である。

まず第二の文を考えてみよう。この文は、革命の前と後の

フランスを同じ「近代的集権国家」ととらえている。フランスの国家体制が革命前後で変化せず基本的に同質のものであるという認識である。この見方は、一般的に行われている歴史理解とは異なる、と思う。。

最近 P. マクフィー著『フランス革命史』を読んだばかりなので、わたしは、フランス革命が近代的集権国家というあり方を変えることはなかったという認識に、いっそう違和感をいだいた。それでは、フランスの社会が大きく変わったという観点が足りず、18 世紀後半と 19 世紀前半で人々の考え方や行動が変化したことを基底にある社会の変化とむすびつけて理解することが困難になる。

マクフィーの著書は、ありがちな政治史中心の歴史記述ではなく、各地方での出来事や庶民の言動まで拾い上げ、政治・社会・人間のふるまい方など当時の社会の全体を総合的に記述しようとしている。それによれば、18 世紀の絶対王政の時代になっても、中世からの（日本と似た）封建制の慣習が残っていたことが記されている。地方ごとに言葉が異なり（北部と南部の言葉は方言という言い方がふさわしくないほど異なっていた）、各地方・各都市ごとの税についての特権などさまざまな封建遺制が残っていた。そうすると、革命後のフランスは革命前とは異なる体制にあったととらえなければ、革命前後の社会と人々の暮らしの変化を適切にとらえることができないだろう。

日本をフランスと比較するには、近世日本の幕藩体制では、幕府が「公儀」という言葉を占有し、藩のとりつぶしや領地替えを行なうなど集権的な権力を行使していたこと、他方で、各藩は公的な地方政権（藩士は公務員）という側面をもっていたことなどを考慮する必要がある。日本の近世は、近世ヨーロッパの領主である貴族・教会がまだ領地を私的に所有していたのと異なる特徴をもっていたのである。そういう差異は、明治維新とフランス革命の前後で、それぞれの社会に影響したはずである。その差異を知っておくことは、明治維新と呼ばれる日本の政治体制の変革（革命と呼んでもそれほどおかしくない）が社会と人々の暮らしぶりに与えた変化を考えると、比較の視点をもたらして有用だろう。

もちろん同質の面を言い忘れてはいけない。身分制度という言葉は江戸時代にふさわしいけれども、革命前のフランスは、招集された国会が聖職者・貴族・平民の三つの身分の代議員で構成されたことが示すように、身分制社会であった。領主としての貴族と教会は、領地に対して年貢だけでなく労役を課し粉ひき場なども所有して、日本の藩主よりも中世の封建領主のようにふるまった。

日本とフランス・英国との社会の差異は、おもに経済の発展度にあった、とすることができる。近世の西欧は、南北アメリカさらにアフリカの支配をてこに、大航海時代と呼ばれる歴史上初めての準グローバルな経済交易で大きく発展し

た。それが、西欧社会を東アジアの社会よりも大きな勢力としたのである。経済の発展は西欧に市民社会を生んだ。中国や日本も、ある程度西欧に近い経済活動を行なうようになっていたが、豊かな町人がブルジョア市民と呼ばれるほどの階層を形成することはなかった。西欧では、私有地である領地をもつ貴族は経済主体として活動を行ない、そういう貴族とブルジョアはひとつながりの政治・経済的な影響力をもつ勢力という側面をもっていた。近世日本の社会を西欧の社会と比較するときには、この視点からの考察が必要だろう。

ヨーロッパ内での密接な経済的・文化的な交流に加えて、南北アメリカ・アフリカ・アジアにまたがる交易を発展させた西欧社会は、近代的な文明国家に近づきつつあった。それが、啓蒙時代と呼ばれる社会を生み出した。この面で、日本や中国は圧倒的に遅れた。英国に少し遅れて、18世紀のフランスは、そういう社会に見合う近代的な思想を培った。その思想の高まりがフランス革命という大きな社会変動をもたらしたのである。

近代的な思想はフランス革命の前にすでにあった、ということである。先ほどの第三の文で、トクヴィルが「近代的社会の実質は、フランス革命によって何ら変わることがなかった」と言ったことが引かれているが、トクヴィルが言いたかったことは、フランスの社会が近代的な思想をもつようになっていたということである。実際、彼の主著の表題は『アメ

リカの民主政治』で、独立したばかりのアメリカの社会に、フランス革命の標語になった自由・平等・博愛が表わす政治思想を追究することが目的だった。フランス革命はそういう思想を育んだ社会が引き起こしたのである。トクヴィルの言う「近代的社会」は「中央集権国家」のことを意味するのではない。

そうすると、日本の近世から近代への革命も、本質的には、中央集権国家を創ることにあったのではない。しかし日本には、西欧の市民社会とそれがつくり出しつつあった近代思想はなかったから、討幕派も幕府主導派も、当面のこととして英国やフランスが到達した近代的な国家体制の建設をめざしたのである。植民地化の危険に直面した有意の人々は、とりあえず、西欧流の政治体制と社会制度を整えることをめざした、と言える。長く政治の局外にあった天皇をかついで、古代の政治制度を復古するのが手っ取り早い方策だった。もう一つは、長く平和な時代に、日本の古典であった『古事記』と『日本書紀』が人々の教養の一つとなっていて、その物語が政治的な思潮を生み出すように働いたからである。当時の世界で王政が常識だったから、「万機公論に決する」としても、王を戴く政治体制は自然なことと思われた。

討幕派と幕府主導派とどちらが政権をとるかということに関しては、将軍と諸侯が影響力を残す集権国家よりも庶民があまり知らなかった天皇一人を主権者とする体制の方が、

結果として、平等な社会へ移行するのに適していた、と言えよう。実際、日本でも短い期間で、主に下級武士だった爵位の獲得者たちと、裕福な経済主体・地主たちが名望家として社会を主導するようになった。曲がりなりにも、明治維新を主導した人たちが思い描いていた社会ができたのである。それは、近世晩期にすでに日本社会の基底に芽生えていた趨勢が実現したということである。

さて、問題は、そうやってできた日本の近代社会が、近世の社会とどれだけ違っていたかということである。ここまでの考察は、その問題に解答を提示できていない。渡辺京二さんが思索する問題、近世日本の社会がどういう優れた特質をもっていたかを具体的に知るには、さらに社会学的な手法での探究がなされなければならないだろう。その課題をわたしは果たすことができない。

ただ、ドイツの社会学者テンニエスが提唱したゲマインシャフトとゲゼルシャフトという概念がこの問題を考える糸口を与える、と言うことはできるだろう。近世の社会は古い共同体のあり方を残すゲマインシャフトと呼べるものだったが、近代化は共同体を解体してゲゼルシャフトという人間関係のうすい社会に変えたのである。近代社会は、個人が資本主義的経済活動に専念して多様な人間関係を失い、経済が主導する人間関係が支配的になった社会である。ゲマインシャフトからゲゼルシャフトへの移行は欧米社会で始まり、日

本の近代化も後者の社会をもたらしたのである。欧米でも日本でも、現代の人間は、ゲマインシャフトのもっていた人間味のある社会を懐かしむということが起きる。

＊

このようなおおざっぱなとらえ方で満足することはできない。日本の近世社会の優れた特性をもっとよく識ることは今でも意味があることだ、とわたしは思う。渡辺京二さんの著作を読むのも、そういう手がかりがそこにあるだろうと考えるからである。今度の書物で渡辺さんは、さまざまな人々の生き方を記述しているが、とりわけ、幕末の政府で重要な役割を果たした人物川路聖謨（かわじとしあきら）に焦点を当てている。ここからは、江戸期の社会と文化が育てた代表者の一人である川路聖謨という人の生き方をたどり、できれば、一人の人間を形成した「場」である社会と文化がどのようなものであったかにまで思索を及ぼしてみたい。

渡辺さんに促されて読んだのは、日本歴史学会編集の人物叢書の一冊、川田貞夫著『川路聖謨』（吉川弘文館）である。読中読後に感じたことを一言で表わせば、日本にかつてこういう人がいたという感嘆である。白状すれば、倒幕維新の方を肯定する者であるが古臭いわたしは、日和見をしていた諸藩が京都での小御所会議クー・デター後に討幕へと雪崩をうって参加したとき、『史記』列伝先頭の伯夷・叔斉に倣って、ピストルという近代

的な道具で自死した聖謨の辞世の句に感動した。奈良奉行のとき天皇陵の保存に一役買おうとしたほどの人が、天皇側が自分の仕えた幕府を倒そうとしたとき、むしろ体現していた儒学の倫理を尊重して伯夷・叔斉の節操を選んだことに、感嘆したのである。

川路聖謨という人の生き方に感心したのだが、わたしはどういうところに引かれたのだろうか。この人を思想的に独創的な人と見ることはできないが、当時の西洋とくらべても文化的に十分成熟した人ということ是可以する。政府の最上位の官僚として考えれば、今日のほとんどの官僚よりも優れていたことはまちがいない。

川路聖謨という人をつくったのは、戦争がなくて安定した江戸時代の文化であり、とりわけその儒学であった。古代の孔子・孟子の道德哲学と朱子の理性学である。孔孟哲学は内面化されてその人格の中心にあり、格物致知の朱子学はおそらく生来の好奇心を発揮するようにしたのだ。日記など記録を書きつける習慣も自省を促しただろう。それらの記録から知られることは、学んだことを体現してしかも開明的な生活を送ったということである。その生活ぶりは平凡人にはまねのできないほどのものだった、と思う。

けれども、川路聖謨は保守的な人だったと言う人があるだろう。たしかにそうだろう。奉行となって行った各地での庶民に対する施策も、基本的には幕藩体制を維持するものであ

った。しかし、孔子が唱えて東アジアの建前であった民衆の道徳的支配を、聖謨ほど実際に遂行しようとした人はやはり珍しかったのだ、と思う。また、幕末の重大な局面で、たとえばロシア使節のプチャーチンとの外交交渉で発揮された態度は漸進主義である。しかし、当時の大局的な動きを見れば、その現実的な言動は十分よく機能したのだ、とわたしは思う。そういう姿勢と言動が一人の人間に体现されていることは刮目すべきことで、渡辺京二さんの評価はうなずける。

ところが、川路聖謨は、渡辺さんが理性がないと判断する藤田東湖と親しく徳川斉昭と交流があった。他方で、渡辺崋山などの蘭学のグループと近く、伊豆菰山代官の江川太郎左衛門など開明派の幕府官僚とも同じ方向を目指していた。だから、現実主義者川路聖謨の政治方面での考え方にはもっと幅があったのである。全体としてこれらの人々を見れば、江戸期の文化と考え方を大なり小なり重なり合うように共有していたのである。そして、人はすべてのことを把握してこまかいことまで律することはできないから、日ごろの生活において暮らしている文化で主流の考え方と生活態度をとることは肯定できることである。それがバランスがとれて一本筋の通った生き方となれば、凡人を超えることになるのだ。デカルトもそんなことを言っていたように思う。

渡辺京二さんは明治の近代化で貴重なものが失われたと嘆いているが、いわゆる明治維新の前後で変化した庶民の暮

らし方や考え方のどういうところだろうか。一言で言えば、江戸期に安定していた文化が維新後大きく変化したせいで、とわたしには思われる。維新後には欧米の文化がどっと入ってきた。和魂洋才と唱えられたが外形的変化は大きく、習俗など基底的なものは続いたが、言動はやはり変化せざるをえなかった。そこには、近代化によるものすなわちゲマインシャフトからゲゼルシャフトへの変質と、西洋と日本の伝統とで大きく異なる文化の異質性と両方があった、としてよいだろう。二つの変化は歴史的にまぬがれることのできない変化だった、とわたしには考えられる。

それを避けられなかったことと考えるなら、渡辺京二さんの哀惜に同調するとしても、他方で、その変化を受けいれざるをえない。明治維新から150年経ち、アジア太平洋戦争での敗北からでも80年が経とうとする現在、失ったものを懐かしむだけではいけないだろう。その哀惜を右翼的な政治イデオログに利用されないように注意しなければならない。二十一世紀のわれわれは、川路聖謨のような人を手本にして、現代にふさわしく筋の通った暮らし方や考え方を築いていくのでなければならない。維新前後に来日した欧米人が感心したような生活文化を培わなければならない。ただし、近ごろ見たり聞いたりするようなあまりにも情緒的なものではない、世界中の人が見ても少々立派な言動に近づかなければならない。それが、渡辺京二さんの望んでいることだろう。

追記

2022 年 12 月下旬この思索がほぼまとまったころ、渡辺京二さんが亡くなったことをニュースで知った。7 月に出版された『小さきものの近代 1』は遺作となったのだ。おそらく身体に衰弱を感じながらの執筆だったはずだが、こういう書き物を完成する気力に感服する。聲咳に接した人たちの悲しみの中で、読む人のほとんどいないホームページにささやかとはいえ、部分的に批判を含む一文を載せることにためらいが生じて、今日までハードディスクの一隅にほっておいた。

2023 年 7 月大暑

海蝶 谷川修